



第5回 日本ダンスフォーラム賞 JaDaFo Dance Award 2010

日本ダンスフォーラム大賞 受賞

珍しいキノコ舞踊団 Strange Kinoko Dance Co.

日本ダンスフォーラム賞 受賞

伊藤郁女 Kaori ITO

日本ダンスフォーラム賞 特別賞 受賞

厚木凡人 Bonjin ATSUGI



Strange Kinoko Dance Co.



Kaori ITO



Bonjin ATSUGI

授賞式 2011年3月22日(火) こどもの城 906号室

- 第1回 日本ダンスフォーラム賞受賞者
白井剛 Tsuyoshi SHIRAI 遠田誠 Makoto ENDA 矢内原美邦 Mikuni YANAIHARA
- 第2回 日本ダンスフォーラム賞受賞者
黒沢美香 Mika KUROSAWA 井手茂太 Shigehiro IDE 佐東利穂子 Rihoko SATO
- 第3回 日本ダンスフォーラム大賞受賞者 ニブロール Nibroll
日本ダンスフォーラム賞受賞者
近藤良平 Ryohei KONDO 小野寺修二 Shuji ONODERA 井手茂太 Shigehiro IDE
- 第4回 日本ダンスフォーラム大賞受賞者 勅使川原三郎 Saburo TESHIGAWARA
日本ダンスフォーラム賞受賞者
黒田育世 Ikuyo KURODA KENTARO!! Kentaro!!

第5回日本ダンスフォーラム賞選考過程

グローバルなコンテンツでダンスの再編を

榎本了亮 Ryoichi ENOMOTO JaDaFo 賞 2010 選考委員長

2006年度より始まった「日本ダンスフォーラム賞」は、日本におけるコンテンポラリーダンスの「年間賞」として設立いたしました。選考は、国内作家による国内公演の作品、および国際協力作品等の中から、年間活動に優れた成果を挙げた作家(コレオグラファー・演出家)公演グループ、ダンサーを、日本ダンスフォーラム・メンバーが推薦し、投票・討議等によって「日本ダンスフォーラム大賞」1名(あるいは1グループ)、「日本ダンスフォーラム賞」若干名(グループ)を決定しています。

「コンテンポラリーダンス」を広義に理解すれば、「現在のダンス」ということになりますが、日本ではある時期から始まるダンスの潮流を、固有名詞でこう呼ぶようになります。これはアメリカで始まった「ポストモダンダンス」の衰退する70年代末、あるいはフランスから始まりヨーロッパの大きなダンスムーヴメントとなる「ヌーヴェルダンス」が起きた、80年代初頭あたりからのダンスを、「コンテンポラリーダンス」と呼んでいます。明快な定義がある訳ではありませんが、ムーヴメントや、コンセプトを重要視したポストモダンダンスではない、シアトリカルで、スペクタクルな要素が強くなるヌーヴェルダンスに共振するようなもの、あるいは日本ではテクノロジーアートと連動することもひとつの要素だったといえますが、そうしたダンス傾向のあるものを広く、「コンテンポラリーダンス」と呼ぶようになります。ある評論家は、暗黒舞踏の創始者である土方巽が亡くなり、勅使川原三郎がバニョレ国際振付賞で受賞する1986年を、その起点とする考えもありますが、いずれにしてもこのムーヴメントも4半世紀が過ぎたことになります。

90年代初頭、郊外の団地のキッチンで、カセットテープをかけて踊り出したような珍しいキノコ舞踊団の登場を、私は「変態少女舞踊」と命名しましたが、Hアール・カオスや、レニ・バツの活動も、それに同機するものでした。珍しいキノコ舞踊団は、永遠の少女舞踊でもあるかのように、若い女性ダンサーたちのムーヴメントを牽引してきました。今回の大賞受賞は20年目の快挙といえるでしょう。伊藤郁女は2000年代前半から、ドゥクフレや、プレルジョカージュの作品にダンサーとして参加し、ヌーヴェルダンスの最も強い刺激の中で活躍する若い舞踊家です。今回は数少ない日本での自作の発表で、その独自性への期待と奨励を込めて、多くの評価が集まりました。厚木凡人はポストモダンダンス創成期の60年代後半、ニューヨークでダンス活動を行い、その後先端的で実験的なコンテンポラリーダンスの先駆けとなる作品を多く発表して来ました。今回のソロダンスへの特別賞は、氏の長年にわたる一貫したダンスフィロソフィーへの驚嘆と、敬意でもあります。

この時間も異なる、日本、フランス、アメリカを基点とした3者の受賞は、停滞をささやかれるコンテンポラリーダンスが、いよいよ新しいグローバルなコンテンツのもとに、再編される契機を支援しているような、象徴的なものであるようにも思います。



日本ダンスフォーラム大賞 受賞

珍しいキノコ舞踊団 Strange Kinoko Dance Co.

珍しいキノコ舞踊団は昨年20周年を迎え、その年に公演した2作品に対してこのような賞をいただきうれしく思います。どうもありがとうございます。

私たちはここ数年、どのカンパニーでも経験するだろう「世代交代」を迎え、試行錯誤していました。

新しく出会う若い人たちに、キノコがやってきたことや、やりたいと思っていることをどのように伝えたいのか、また彼らがキノコで何をしたいと思っているのか悩んでいるうちに、私自身が一番やりたかったことを以前よりもシンプルに強く認識できました。今最高にうれしいことは、その考えをダンサー全員で共有できているということです。スタッフを含め、皆で色々話し合いながらやってきた結果だと思えます。

ダンスを楽しむこと。

舞台からの一方通行ではない密なコミュニケーションができないものかと色々やってきました。これからも観客の身体感覚に直接訴える舞台を目指し、つくっていきたいと思います。そして夢の三世代カンパニーに向けて健康に気をつけながら精進していきます。これからもどうぞよろしくお祈りします。 珍しいキノコ舞踊団代表 伊藤千枝

90年代ダンスの起爆剤として

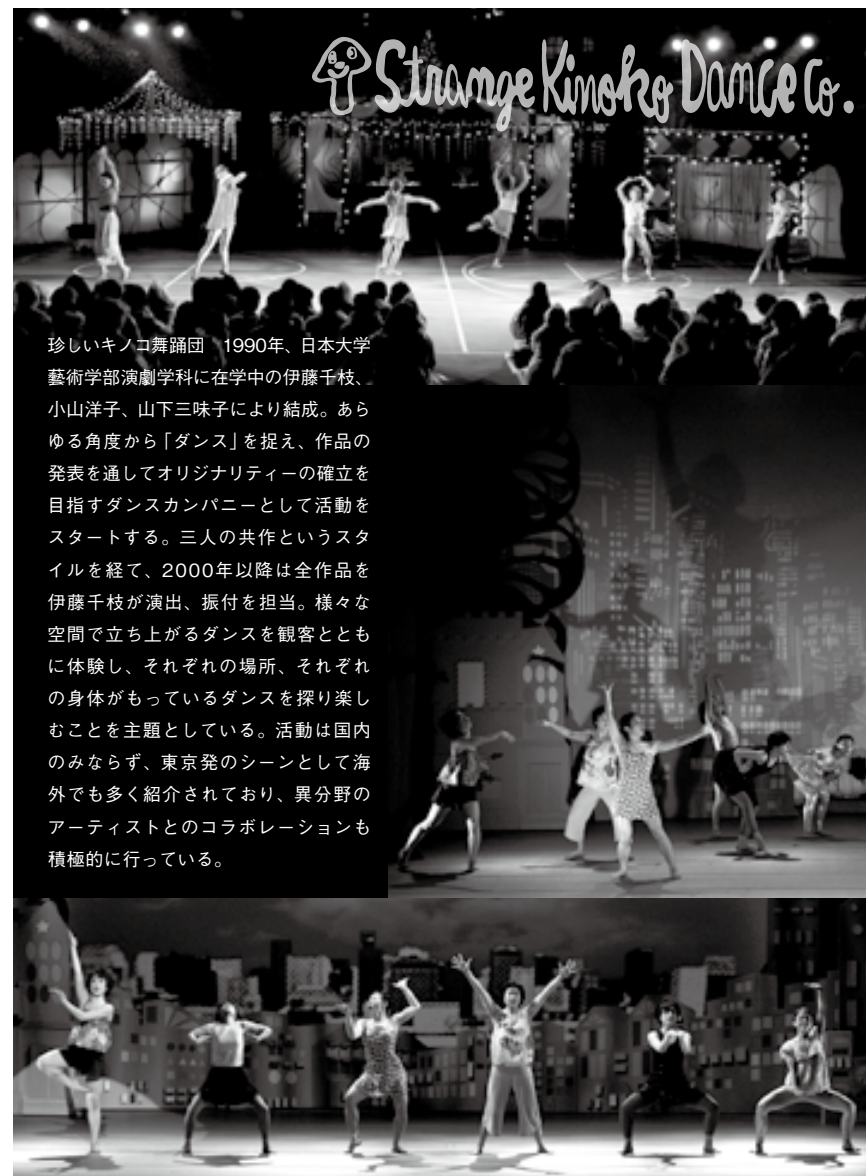
貫 成人 Shigeto NUKI

印象派にとってのモネ、舞踏にとっての土方のように、その経歴がそのままあるスタイルの歴史となる作家がいるものだ。コンテンポラリーダンスにとってそのような存在、それが伊藤千枝と〈珍しいキノコ舞踊団〉である。彼らが活動を始めた90年代、日本でコンテンポラリーダンスが「爆発」し、その起爆剤となったのが彼らだったからだ。そのキノコは昨年、何度目かのピークを迎えた。

彼らのピークは以前にもあった。スーパーデラックスや原美術館でおこなわれた『フリル(ミニ)』『フリル(ミニ)ワイルド』は、誰もが認め、語り継がれる彼らの頂点だ。

だが、その後しばらく模索の時期が続いたように思われる。それは、それまでのように、劇場とは別の、客席と地つづきの空間ではなく、プロセニウム舞台での手法を確立するための模索だった。

その解になったのが、昨年1月、世田谷パブリックシアターで上演された『私が踊るとき』である。そこでは、音楽や背景、動き、セリフなどの絶妙な組み合わせが観客の気持ちを解きほぐし、我と我が身を踊りに捧げた、(まるで『カフェ・ミュラー』におけるピナのような)ダンサーの姿に



珍しいキノコ舞踊団 1990年、日本大学芸術学部演劇学科に在学中の伊藤千枝、小山洋子、山下三味子により結成。あらゆる角度から「ダンス」を捉え、作品の発表を通してオリジナリティーの確立を目指すダンスカンパニーとして活動をスタートする。三人の共作というスタイルを経て、2000年以降は全作品を伊藤千枝が演出、振付を担当。様々な空間で立ち上がるダンスを観客とともに体験し、それぞれの場所、それぞれの身体がもっているダンスを探り楽しむことを主題としている。活動は国内のみならず、東京発のシーンとして海外でも多く紹介されており、異分野のアーティストとのコラボレーションも積極的に行っている。

2010.10『20分後の自分と。』(3331 Arts Chiyoda 屋上) / 2010.01『私が踊るとき』(世田谷パブリックシアター) Photo: Yohta Kataoka

観客は崇高すら感じたのであった。一転して10月、台風に襲われた東京の、屋外で上演された『20分後の自分と。』における、懐かしくも、パワーアップした弾けぶり。

キノコは昨年創立20周年を迎えた。その次なる挑戦がいかなるものとなるのか、楽しみである。



日本ダンスフォーラム賞 受賞

伊藤郁女 Kaori ITO

10年ほど日本を離れるようになり、最近になって、自分のアイデンティティーを探すようになりました。ニューヨーク留学後、フランスに7年ほど滞在していますが、その間、日本には仕事以外ほとんど帰らなくなってしまいました。そういった中で、今回の作品創りを通して、日本とヨーロッパとの間にいる自分のアイデンティティーを探し続けていた気がします。そして、彩の国での公演『記憶のない島』で、お客さんに喜んで頂け、今回、ベストヤングコレオグラファー賞（オンステージから）と、このJaDaFo賞を頂いて、本当に光栄です。ヨーロッパで現在、仕事のオファーが多く、その中で、自分の願望に合った仕事を選んでいけるようになったのと同時に、日本へ戻って公演をする機会が増えたのは、自分のキャリアでとても大事な事ですし、これからはこういったチャンスをいかして、日本の様々な人々に舞踊を広めていければと思います。日本で舞踊を観た事の無い人々が、私の作品を観て、何かしら共感を持てるように、これからも日本とヨーロッパとを掛け合っていきたいと思います。

ダンスがダンスでなくなる瞬間

西田留美可 Rumika NISHIDA

伊藤郁女がフィリップ・ドゥクフレの『IRIS』でキツクな役柄を踊ったとき、壊れるまで踊ってしまいそうな姿を見て、その後の成長を予感させられた。身体能力が高いダンサーがその美意識を内側から壊していくのはかなり試練や葛藤、あるいは自らの探求を経なくてはできないことではない。昨年の『記憶のない島』では、ダンスが内側から壊れてしまいそうな瞬間、ダンスがダンスでなくなる瞬間をもダンスにしようという意識が見え、常に壊し生み出し変化し続けているのを感じた。表現者としての探求心の強さは、ダンサー、女優、振付家としてだけでなく、映像作家としても活動していることから伺われる。アラン・ブラテルとの出会いが彼女の美意識に大きく影響したと聞いたが、リスクを負うことを厭わず挑戦し続ける姿勢が、多くの振付家や演出家を魅了し、ともに仕事をする事となったのだろう。この作品はすでにフランスで振付賞を受賞しているのだが、グローバルに活動しつつも、日本人としてのアイデンティティを大切にしている姿勢は、今後の日本の若いダンサーや振付家たちを牽引していく存在となるだろう。彼女の貪欲なバイタリティーと挑戦しつづける姿勢に応援と期待をこめて賞を贈りたいと思う。



伊藤郁女 1979年生まれ。5歳からクラシックバレエを高木俊徳に師事。98年、STスポット「ラボ20」榎本了志賞を受賞。ニューヨーク州立大学に留学。02年、横浜ダンスコレクション「財団法人横浜市文化振興財団賞」受賞。03年、フィリップ・ドゥクフレ『IRIS』でソロパート。04年、横浜ダンスコレクション「ナショナル協議員賞」受賞。文化庁海外派遣員としてアルピンエイリーに留学。プレルジョカージュと活動。07年、ジェームズ・ティエレ『Au revoir parapluie』に参加。08年、自作『ノクティルック』上演。09年、『SOLOS』をマルセイユ国立劇場で発表。シディ・ラルビ・シェルカウイ振付のオペラ『眠れる美女』主演。10年、アラン・ブラテル『アウト・オブ・コンテクスト』出演。自作『Island of no memories』で（ル）コネッセンズ1位を受賞。10年、同作品を彩の国さいたま芸術劇場で上演。11年、同作品をEDNの援助により、フランス、スイス、イタリア、ポルトガル、ドイツ等で公演予定。コメディ・フランセーズの俳優ドニー・ボダリデスと『ジギルとハイド』にハイド役で出演予定。

『Island of No Memories—記憶のない島』 Photo:matron



日本ダンスフォーラム賞 特別賞 受賞

厚木凡人 Bonjin ATSUGI

この度は有難うございました。お知らせを戴いた時、大変驚きました。今更賞など戴けるとは思ってもいませんでした。特別賞と聞いて「あーなるほど」と思ったのですが、兎に角嬉しかったです。

今迄、色々と自分に問いかけては反省したり自信を持ったり、やって来ましたが、しばらく創ること踊ることから離れていましたが、『まどろみ』は久し振りの舞台でした。しばらくは自分はどの地平に立てばいいのか、どう対処すればいいのか、纏まりのつかない日々を過ごしていました。

動き出してみても、結構素直に考えが纏まってきたりして、すごく楽しくなりました。今回舞台上で楽しさを感じながら、終わってとても幸せを感じました。

今更言うまでもありませんが、踊りの本質は踊ることかなあーと感じながら。この時期『まどろみ』を踊れて良かったと思っています。有難うございました。

『まどろみ』からよみがえる、厚木ダンスフィロソフィー

榎本了壺 Ryoichi ENOMOTO

1990年、スターダンサーズバレエ団の芸術監督であった厚木凡人は、当団25周年記念の座談会の中で、コレオグラファーとしての力を強く期待されているのに対して、「いや、踊りは踊ること以外にはないのですよ。ぼくの場合は、作品を創る原動力になる不定愁訴にしても、踊った結果ですよ。もう踊りは最高。」と、踊ることに絶対の価値を表明している。60年代から、最も先端的な作品を発表し、世界のポストモダンダンスの潮流を日本に流入させる。その活動は土方巽の暗黒舞踏と対極の位置で、最も過激なダンスにチャレンジしてきた。その作品の多くを厚木自身が踊り、それが厚木のダンスフィロソフィーを一段と強固なものにしていた。それから幾霜夜、その厚木凡人が、「EKODA de DANCE」のプログラムで踊った！ 作品発表と自らが踊ることを、厚木自身まるでまどろみの中のように、長く猶予の時間を過ごしていた。私たちは、「もう厚木凡人のダンスを見ずに終わってしまうのではないか」という、危惧の中にも過ごしてきた。しかし厚木凡人は踊り出した！ 『まどろみ』というこの作品は、まるでまどろみから覚醒するように、静かに力強く、70年代の厚木凡人の記憶と少しもブレることのない、一貫したダンスコンテンツで構築されていた。その優美で豪快なムーブメントは、時間を経るごとに透明で堅牢なダンスという織物を私たちにプレゼントしてくれた。ブラボーっ！ 厚木凡人！



厚木凡人 1950年代よりモダンダンサーとして活躍し、1966年から1968年までジュリアード音楽院にフルブライト留学し、またメトロポリタンオペラバレエ、アメリカンバレエセンターで学ぶ。'70年代は多数の振付作品を創り、ポストモダンダンス運動の最先端を走る。1975年フェスティバル・ドートンヌに招待され『裂記号2』を上演、Three Mention賞を受賞。1982年アメリカン・ダンス・フェスティバル、ザグレブ現代舞踊祭に招聘される。1989年から1993年までスターダンサーズバレエ団の芸術監督に就任、ポストモダニズムのアクセントのついた作品は当時の舞踊界に衝撃を与えた。現在BONJIN DANCE COMPANY主宰。○'70、'71、'81年舞踊批評家協会賞受賞 ○「DANCE TODAY」企画・出演 ○国際交流基金の依頼によりウルグアイ国立バレエ団の振付・指導

小さいながらも強いオリジナリティ

石井達朗 Tatsuro ISHII

オハッド・ナハリン、ケースマイケル、クリストフ・マルターラー、ロベール・ルパージュなど、海外勢の舞踊・演劇の強力な布陣に押されたわけでもないと思うが、日本の舞台が小さく見えた。こんなとき、小さいながらも強いオリジナリティをもった活動は、独自の輝きをもち、海外公演のチャンスも増えてくる。チェルフィッチュ、山下残『せきをしてひとり』、川口隆夫『Tri_K』、コンタクト・ゴンゾなど。ヨーロッパから戻った伊藤郁女の『Island of No Memories』も、妥協のないアプローチでテーマに正面から向き合っているのが爽快だ。ただし、ミルカ・プロケソバの使い方が中途半端な感じもした。今のコンテンポラリーダンスの元気のなさに切り込みを入れるような厚木凡人久々の舞台。一見、モダニズム風だが、シャープに張り詰めたこんな充実感は最近のダンスでは感じられなかった。珍しいキノコ舞踊団、2年半ぶりの単独公演は、多様なダンスをリレー的に次から次へと登場させながら、完結したファンタジーワールドをつくる。これから半世紀先まで踊り続けてください。

永遠に少女的なもの

尼ヶ崎 彬 Akira AMAGASAKI

珍しいキノコ舞踊団への授賞は、今年の成果に対してというより、これまでの20年にわたるコンテンポラリー・ダンスへの貢献を評価したものである。20年前の少女はアラフォーとなったが、舞台上に現出する世界に変わりはない。そこには永遠に少女的なものと、それを奇妙なキノコのように眺める自省の眼とがある。そして20年の間このキノコの後継者は出なかった。つまり少女的なものを新しい形で提示するグループは生れなかった…と書いたとたんAKB48がいることを思い出した。彼女らの出自は秋葉原のオタク向けアイドルである。この街のアイドルとファンの関係は、かつてのような無邪気なものではない。二次元世界の模倣という過剰な虚構性の舞台と、それに輪をかけて過剰なおタ芸で声援するオタクたちは、もはや少女的な世界が悪ノリとしてしか成立しない屈折した状況を示していた。残念ながらAKB48は普通のアイドルとなって過激さを捨て、メジャー化をとげた。奇妙でありつづけるキノコたちは、今なお先端に立っている。

人が踊るといこと、人を踊らせるもの

岡見さえ Sae OKAMI

誕生20年を迎え、複数の新作に加えアセロラ体操、夜カジ体操とCMでも活躍した珍しいキノコ舞踊団。一瞬のCMでも見破れるのは、キノコ語、キノコ文法が確立されている証拠だが、自由で心地良い踊る身体を探求する『私が踊るとき』『音楽と。』の新たな試みも興味深い。以前、伊藤千枝氏が「嘘が嫌い」と語ったのが印象に残っている。舞台では誰も最高に格好良く装うが、ダサイ自分もまた真実。自分だけのハナウタ的な踊りはいつから作品になるのか？一見ヘンテコな踊りを踊りながら、「人が踊るといこと、人を踊らせるもの」の謎に真摯に立ち向かう彼女らから目が離せない。

厚木凡人氏がソコで見せた、静謐でありながら革命の胎動のようなざわめきを響かせる不思議な踊りは、透明な水晶のように美しく忘れがたい。

欧州で活動する伊藤郁女氏の快進撃が続いている。今後もあらゆるバインドから自由に、他者の期待に媚びることなく彼女だけの表現を磨き上げて欲しい。

「覚悟」のある人達の活躍が魅力的

芳賀直子 Naoko HAGA

これ！という決定打がない年だったような気がいたします。年間見る本数が増えても本当にココロうたれる舞台数は変わらないのですが、それでも素晴らしい舞台に出会った時の気分が忘れられずに通いつづけていることは、見始めた頃から変わっていません。ただし、昨年は国内外の出張がとて多かつたこともあり、例年よりも見る本数が少なくなってしまいました。(海外ではダンスに限らず素晴らしい舞台に多数出会いましたが、それはまた別の機会に…) そのため今回の受賞者の中で昨年舞台を見ることができたのは2人の伊藤さんだけでした。郁女さんはデビュー当時から見っていますが、成長ぶり今後の展開にとて期待しています。

現在の日本のダンスシーンについて少ない文字数で誤解を恐れずに言うならば、個人的にはこのところ、若手の台頭よりもむしろすでに経験を積んだダンサーとして振付家として生きる「覚悟」のある人達の活躍に魅かれます。経験や技術面を評価することではなく、作品全体の質においてです。若手については、「覚悟」のある、言い換えれば芸術的に「肝の座った」ダンサー・振付家の台頭、楽しみにしています。

2010年度 所感集

『多様に面白く—日本の現代舞踊』

立木燐子 Akiko TACHIKI

斬新な創作とともにポスト・モダンダンスの息吹を日本の舞踊界に紹介し、大きな影響を与えてきた厚木凡人。独創的な身体性と発想で独自の世界を拓いた珍しいキノコ舞踊団、その足跡からは、多様に面白く開花してきた日本の現代舞踊の歩みを読み取れる。

海外で活躍する気鋭振付家のなかでも伊藤郁女の最近の成果には目覚ましいものがある。日本でも上演された『記憶のない島』は、スケールの大きな構成と個性的な振付語彙が光った秀作。

ほかに、舞踊の要素が改めて見直されているオペラ分野で、二期会との共同作業を通じて総合芸術としての演出・振付に新境地を拓いているのが大島早紀子。多義的なイメージ溢れる詩的世界を創出した『ファウストの劫罰』（ベルリオーズ曲）の舞台成果は、評価されている。

追悼 高谷静治さんのこと 三浦雅士 Masashi MIURA

高谷静治さんは高校（青森県立弘前高校）の先輩なのだが、そのことを長く知らなかった。話し込んだことがなかったのである。経歴のことだけではない。ダンスのことについてもほとんど話したことがない。パニョレのコンクールの日本プラットホームの審査員になってくれと言われたときも、それだけで、ほかには何も話さなかった。ヴィジョンなどいっさい話さなかった。用件のみである。高校の先輩だということも、それだけのことを笑いながらおっしゃっただけで、話が盛り上がったわけでもない。詮索することも、されることも、好きではなかったのだと思う。

まさに「静かなる男」である。高谷さんが尽力されていたローザンヌ・コンクールについても、だから何も知らない。昨年亡くなられたブランシュワイクさんがどちらかという強引な話し好きで、こちらはちょっと苦手なタイプだったので、そんなこともあってローザンヌのことはいよいよ何も知らないのだが、高谷さんは、何らかのかたちでブランシュワイクさんとも交渉があったらうから、裏面ではかなり強固なものを持っておられたに違いない。そういう強固な面はしかしまったく表面には出さなかった。

ある段階から韓国のダンスに深くかかわっておられたことからそれが分かる。世界のダンスの潮流を鋭く見抜いておられたにもかかわらず、喧伝するといったことはまるでなかったのだ。その静けさは不気味なほどである。謎とさえ言っている。

江口隆哉も寺山修司も津軽の出身である。高谷さんは彼らとは驚くほど違っているが、しかし津軽人のもうひとつの側面を鋭く表わしているような気がする。



日本ダンスフォーラム 2003 - 2010 の記録

第1回 「ダンスクリエーションの現場 / コンテンポラリーダンスの現在」

出演=水と油 白井剛 黒田育世 尼ヶ崎彬 楯屋一之 川崎徹 立木燐子 三浦雅士 榎本了壺
2003年9月19日(金) 丸ビル 8階会議室 ROOM-4

第2回 「映像とダンス」展 (東京都写真美術館共催)

出演=伊藤キム 三浦雅士 北村明子 楯屋一之 矢内原美邦 榎本了壺 木佐貫邦子 尼ヶ崎彬
川崎徹 貫成人 2003年12月27日(土) 東京都写真美術館

第3回 「ダンスは笑う!？」

出演=近藤良平 貫成人 井手茂太 尼ヶ崎彬 康本雅子 石井達朗 鴻上尚史 川崎徹
立木燐子 三浦雅士 2004年6月12日(土) こどもの城 8階研修室

第4回 「ダンスの空間」(ダンス・トリエンナーレ TOKYO 2004 共催)

出演=伊藤千枝 namaiki 楯屋一之 黒沢美香 川崎徹 鈴木稔 日比野克彦 榎本了壺
北川原温 尼ヶ崎彬 石井達朗 貫成人 立木燐子 2004年11月21日(日) スパイラルホール

第5回 「コンテンポラリーダンスはどこまではたけるか？」

「コンテンポラリーダンスの可能性」(横浜ダンスコレクション共催)

出演=ミルナ・ザカール ビルエッタ・ムラリ 石川洵 三浦雅士 石井達朗 楯屋一之
高谷静治 榎本了壺 2005年1月23日(日)・24日(月) 横浜赤レンガ倉庫1号館

第6回 「超ダンス」(東京写真美術館共催)

出演=笠井観 立木燐子 岡田利規 西田留美可 岩淵多喜子 堤広志 三浦雅士 川崎徹
尼ヶ崎彬 芳賀直子 貫成人 2005年11月6日(日) 東京都写真美術館

第7回 「ことばとダンス」(ダンス・トリエンナーレ TOKYO 2006 共催)

出演=三浦雅士 川崎徹 笹公人 伊藤キム 森下真樹 副島博彦 貫成人 立木燐子 榎本了壺
2006年11月5日(日) EATS and MEETS CAY

第8回 「金森穰が語る金森穰」(日韓ダンスコンタクト共催)

出演=金森穰 唐津絵里 芳賀直子 立木燐子 2007年11月21日(水) こどもの城 906号室

第9回 「ケベック: コンテンポラリーダンスの都」(ケベック州政府在日事務所共催)

出演=クリスティヌ・サン・ピエール大臣 ピエール・デマレ 立木燐子 榎本了壺
2008年10月3日(金) 国連大学

第10回 「2008年度のコンテンポラリーダンスを振り返る」

(第3回日本ダンスフォーラム賞授賞式シンポジウム)

出演=日本ダンスフォーラム受賞者とJaDaFoメンバー 2009年3月31日(火) こどもの城 801号室

第11回 「ダンスと批評」(ダンス・トリエンナーレ TOKYO 2010 共催)

出演=金福喜 山田せつ子 ジネット・ローラン 榎本了壺 貫成人 高谷静治
2009年10月3日(土) カルチャーサロン青山

第12回 「2009年度のコンテンポラリーダンスを振り返る」

(第4回日本ダンスフォーラム賞授賞式シンポジウム)

出演=勅使川原三郎 黒田育世 KENTARO!! JaDaFoメンバー
2010年3月31日(水) こどもの城 901号室

活動の主旨 (抄再録)

私たち「日本ダンスフォーラム」の設立メンバーは、11人という少人数ではありませんでしたが、評論家、学者、研究者、ディレクター、プロデューサー等の、複合的な舞踊関係者によって構成されています。舞踊の世界には現在、さまざまな舞踊分野の学会、ダンサーや、舞踊作家たちの協会、評論家の協会、プロデューサー・ネットワークなど、いろいろな組織があります。しかしダンスの送り手ともいうべき、ディレクター、プロデューサーと、それに対して正確な価値を与える評論家、学者、研究者の連合というのは、極めて新しい、組織といえます。こうした組織は舞踊の世界では、タブーのように、避けてきたような趣すらあります。しかし今こそ、それぞれの立場を乗り越え、既成概念を打破して、より現実的なダンスソサエティの新たな価値創造に向かい、活動すべきときが来ているのです。

日本のコンテンポラリーダンスは、さまざまなクリエーションと対置して考えても、明らかに先鋭的で、国際的な可能性にとんだ表現メディアであることは、いうまでもありません。その魅力と感動は、じわじわと拡大しています。私たち「日本ダンスフォーラム」は、このムーヴメントに、勢いと、スピード、そして確かな価値を広く多くの人に伝える使命を担っています。

2011年3月 日本ダンスフォーラム

日本ダンスフォーラム Japan Dance Forum

Member

尼ヶ崎彬	Akira AMAGASAKI
石井達朗	Tatsuro ISHII
石川 洵	Makoto ISHIKAWA
榎本了壺	Ryoichi ENOMOTO
大谷 燦	Iku OOTANI
岡見さえ	Sae OKAMI
楯屋一之	Kazuyuki KAJIYA
川崎 徹	Tooru KAWASAKI
唐津絵理	Eri KARATSU
佐藤まいみ	Maimi SATO
副島博彦	Hirohiko SOEJIMA
立木燐子	Akiko TACHIKI
西田留美可	Rumika NISHIDA
貫 成人	Shigeto NUKI
芳賀直子	Naoko HAGA
三浦雅士	Masashi MIURA



発行 2011年3月31日

日本ダンスフォーラム事務局
〒151-0066 東京都渋谷区西原 2-3-3
アタマトテ・インターナショナル内
電話 03-5453-2911 Fax 03-5453-2929
e-mail jadafo@atamatote.co.jp

編集・デザイン=アタマトテ・インターナショナル
シンボルマーク・デザイン=浅葉克己